

静かに自習せよ

—マリコ—

高谷玲子

絵・みつはし ちか



フアン
シリーズ

秋元文庫

静かに自習せよ

—マ リ コ—

昭和49年1月31日第1刷発行

昭和49年3月31日第2刷発行



定価はカバーに表
示してあります。

■著者紹介

高 谷 玲 子

(たかやれいこ)

昭和14年3月生れ

東京都立上野高校荒川分校卒業
処女作「静かに自習せよ」は、
中学3年から20歳にかけて少し
づつ書き上げたもの。その後ガ
ンにおかされて入院、病院生活
をしながらも「涙で顔を洗おう」
と「悲しからずや」を執筆。い
づれも秋元書房刊。昭和40年2
月15日肺臓ガンで死去。

「静かに自習せよ」—マリコ—
は昭和49年1月NHK・TVド
ラマ化

尚「涙で顔を洗おう」はこの「静
かに自習せよ」の続編である。

著 者 ■ 高 谷 玲 子

発 行 者 ■ 秋 元 英 子

発 行 所 ■ 株式 秋 元 書 房
会 社

■ 〒 162 東京都新宿区赤城下町42

電話 東京(268)0758(代)

振替 東京 2 7 0 4 7

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

印刷=暁印刷

製本=大和工業

© AKIMOTO SHOBO 1974

0193-B011-0029

秋元文庫

静かに自習せよ

—マ リ コ—

高谷玲子著



秋元書房

この本を今は亡き

高谷玲子さんに捧げます

目次

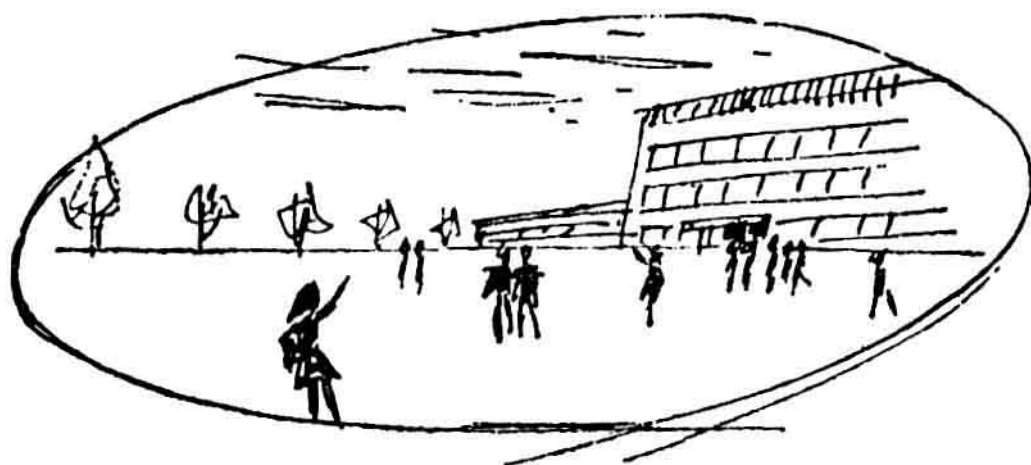
一	わがクラスの面々	7
二	二人だけの月	22
三	パパは野良犬	50
四	珍中の珍事	71
五	プレゼントはもらいどく	80
六	老シャモ先生のお年玉	101
七	きらいな人は大きい	115
八	何とおせっかいな彼	127
九	ああ、か弱き私	140
十	静かにすべし	154



十一 大人になりかけ

カバー・さし絵 みつはしちかこ

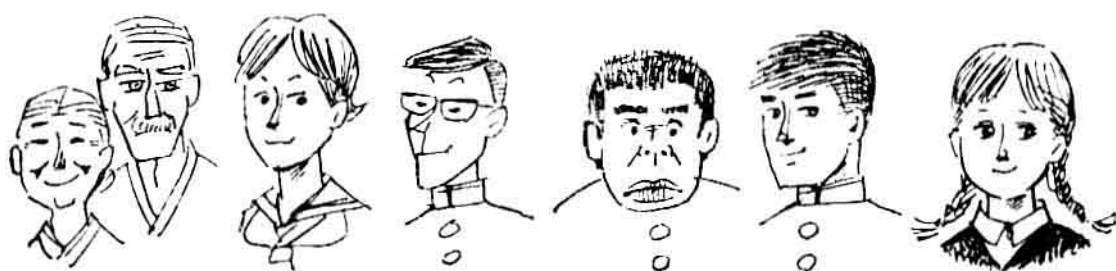
173



静かに自習せよ

— マリコ —





おもな登場人物

私——本名、相川マリコ。通称坊や、時に金魚。おさっしの通り、チビで頭の働きは子供っぽい。二年C組副委員長。

白石雅也——皮肉屋で意地悪。席は私のすぐうしろ。秀才で委員長のくせに、エスケープ組のピカーである。

花村千太郎——不良の親分と自分でも、またクラスの者も思っているが、あんがい純情。花千といわれている。

市倉——口さえきかなければ、初対面の者は、ガリ勉組の秀才とまちがえてしまうほどだが実は低空飛行の鈍才。

三木律子——スピーカーの申し子ともいわれるほどの口達者。口喧嘩では男性軍もたじたじ。女史と呼ばれる。

老シャモ先生とエチケツトおばあさん——マリ子の祖父母。有閑荘と称する家に住んでいる。こわいがやさしい。

一 わがクラスの面々

「雪の明日は裸虫の洗濯」だそうだが、昨日はみぞれまでばらつくほど寒かったのに、今日の暖かさは裸虫ならずとも私だって洗濯をしてもいいような気がするほどである。おまけに私の席は窓際にあるのだから、ボカボカと気持の良いこと、まさにストーブ不要である。

これで五時間目が始まる前に職員室から呼び出しさえなければ、今日という日は大安吉日である、私は鉛筆をけずりながらの舟漕ぎを楽しんでいた。が、

「うちの委員長どうかしていない？ 寛大過ぎるわよ」

「そら、ミルトンも言ったでしょう。『彼等が自由と呼ぶは放縦のことだ』うちの委員長のため
に言われたようなものだと思うわ」

この傍若無人ぼうじやくきわまる言葉に、たちまち太平の夢は破られ、舟は静止し、鉛筆をけずる手は止まった。

「寛大もいいけど『過ぎたるはおよばざるがごとし』というでしょう。うちの委員長のは完全に放縦よ。また、ウェブスターも言ってるよ。『自由は健全なる制限に比例して存在する』ってね。制限のない自由なんて『自由』という神聖な言葉に対するほうとくだし、また自由そのものをおのずから否定することになるわ」

この最後の声明は三木律子らしい。一瞬驚きに全機能を硬直させた私も、また始まったな、とおかしくなった。が、顔を上げない。

うちのクラスを大別すると、エスケープ組とガリボソ組の二組に分かれていて、中立派がほんの少数いるにはいるが、少数党だからあってもなきがごとき存在である。この三木女史をリーダーとするガリボソ組は、皆驚くほどいろいろな言葉を知っていて、「いざ鎌倉」という時はいつでもそれを矛^{はこ}とし、そして盾^{たて}ともする。

前の時間、理科の先生がお休みで、その時間宿題の答合わせをすることになり、そんな時、きちようめんな先生は宿題忘却者の名簿提出を委員長に命じたが、クラスの四分の一はかの不名誉なる名簿に名を連ねる資格があったにもかかわらず、わが委員長は名簿を作製しなかったのみならず、彼等不名誉クラス員達に黒板に書かれた答えを写し取るように命じ、すましてそれを理科の先生の机の上に置いて来た。ということがそもそもこのガリボソ組の点取虫共にボソボソと不平をぼっ発させる原因を作ってしまったのである。

ほんのささいな、たとえ蚊の涙ほどの不平であっても見逃せないのが、彼等ガリ勉連中の特質である。とはいえ本当にうるさい点取虫連中である。こうした不正行為やエスケープの悪いことくらい誰だって知っている。しかし、それを一々てきはつしたり、密告したりしていたのではかえってことは重大になる恐れがある。さしあたり国家の情勢にかかわりなさそうだから、黙殺していた方がよい。恐らく委員長もこんな考えでかまえているのであろう。だが、ガリボソ組にはそんなゆうちようなのは一人もない。実にえらい剣幕で声は一段と高くなる。

「委員長が放縦なら副委員長は何のためにあるの？ 副委員長は何をしているの」

副委員長とは、まさしくこの私のことである。だが、別に彼等は私に返答を要求しているのではない。彼等はよくこんなふうにして、他の人に誰かのことをたずねたり、そのあבק返事までしてくれる。

「とにかくうちの委員長といい副委員長といい、実にルーズな放縦主義者でエスケープを奨励しているから見られても仕方がないわ」

「まったくこれから行く末が案じられるわ。北見將軍が知ったら、どんな顔をするか」

おことわりしておこう。北見將軍といっても軍人でもなければ征夷大將軍でもない。隣のクラス委員長、正確には北見哲夫君の別名である。

「彼等のごときを『クラスのタイハイへの誘導者』というのよ」

「とにかくね、何事も度を越してはいけないわ。悪い人達ではないけど、程度を知らないからね。知らず知らずにクラスを破滅の門へと導いてしまうのね、『悪意なき破壊者』とでもいうところね」

「クラスタイハイへの誘導者」「悪意なき破壊者」これらの言葉の中に私がふくまれてさえいなかったならば、実に感心できるのだが……。

私の席は後から二番目、その後が委員長である。いまや委員長への非難ごうごうとして、その不平はクライマックスに達している。聞いている委員長の心境やいかに？ そつとふり向くと、当の委員長閣下、くすぐったいとも、おかしいとも、何とも形容のつかぬ不思議な表情で日誌を

つけている。委員長という名の職業も楽ではないな、と私は氣の毒になった。とやかく言われても、私には委員長というかくれみがあるからまだいい。何かことがあると一番風当りが強いのは委員長である。今の場合がまさにその一例である。が、まだまだこんなのは序の口である。いわば、何といっても、言うだけだからおだやかである。が、中には——もちろん男生徒だが——委員長と意見が合わないで、実力行使に出てくる連中もいる。エスケープはエスケープでも私や委員長より一段とひどいエスケープ組で校内グレン隊にも加盟している。

それから二日後の始業前、私は席についてはいるものの、どうにも落ちつかなかった。ベストエスケープ組の連中、花村千太郎を頭とするこの一隊はいつでもクラスの面よごしなことばかりしている。まったく、三木女史の言い草ではないが「クラスのガン」である。エスケープをするだけなら私も委員長も同様ではあるが、彼等は自分たちの氣に入らない事があるとたちまち乱暴を働く、流行歌を教室内で平気でどなる。上衣のボタンをはずして、帽子をわざと横にまげ、あみだにかぶり、ズボンのポケットに両手をつっこみ、肩をゆすって学校じゅうを横行カッポする。生徒会やホームルーム会の決定事項を破ることを誇りにしている。その上ごていねいにも「花千」こと、花村千太郎を始め、三名ほど柔道部では黒帯をしめているから、委員長をはじめ、誰も手をだせないで泣き寝入りする。まさか幾ら委員長でも——いかに頼りない彼でも——全然手が出せないわけでもあるまいが、いったいどんな対策をその胸中に秘めて泰然自若とかまえて彼等の行動を黙視しているものであろう。ときどき本当に委員長にも手が出せないのではないかと疑わざるを得ないような時もないではない。

ところで花千達は、いつでも決して人に誉められることはしないのだが、今朝はひどい。スト
ーブのまわりでふざけている、取っ組み合いをしている、馬飛びをしている。さすがの私ものん
きにかまえていられなくなった。ああ、こんな時すら、委員長は彼等を黙認しているのであろう
か。ガリボソ組の非難がまた始まったらしく、向う側の方から三木律子らのカン高い声が、きれ
ぎれに私の耳に入ってきた。

その時ついで私の横を通り抜けたものがある。エスケープ委員長だ。委員長はどんどん前へ行
く。教室の中はしんとした。そして委員長は私や他の人々のけげんなまなざしなど一切おかまい
なく、花千一隊のそばまで行った。おやと思って見つめる私は、

「やめたまえ」

といつになくリンとした声を聞いた。

「う？」

とふり向いた花千達は声の主が、ほかならぬくだんの委員長とわかると、

「何だ？」

と肩をそびやかして食ってかかる。まったく困った「ガン」である。

「やめたまえ」

おや？ 今日の委員長の声も態度も常になくリンとしていて委員長の威厳をいかにくそなえ
ている。その上静かだから、隣の北見將軍よりなおおかしがたい。

「オイ白石だまっているよ」

花千は親分のメンツにかけて底気味の悪い声でおどす。その言外には、これ以上ツベコベ言うと許さんぞ、という意味が含まれている。

「やめたまえ」

委員長は三度同じことを言い放った。委員長の横顔が、この時ほどきれいに見えたことはかつてない。キッと花千達に注がれた視線にはばんじゃくの重みがある。委員長がこれほどしっかりした男の子であったとは……見なおす必要がありそうだ。委員長のいつにない態度に一度はろうばいしたものの、すぐに兎は兎であったことに気づいた花千親分は、

「だまれ！」

と一カッした。だが、どういう風の吹き回しでか、今日の委員長には全然きき目がない。

「花千、ベルはもう鳴ったんだ。席へつけ！」

委員長の命令である。しかも私が知る限りにおいて初めての。花千は驚いたらしく一瞬あぜんとしたが、即刻対策案を提出した。

「なぐっちゃまえ」

これが花千一隊の森羅万象しんらばんしょうもろもろに対する解決案である。

「ああっ……」

私は両手をかたくにぎりしめて凝視した。花千は委員長に飛びかかったが、委員長が、す早く、まったくす早く飛び退いたので、彼の身長一メートル七十、体重六十五キロの満身をこめて作ったゲンコツはもろにストーブのエントツをなぐりつけてしまった。

あつ、ストーブが倒れてしまった、学校が火事になる。さすが活発なガリボソ組もピタリと口を閉じたままである。委員長は？ 彼はいつものように、ゆうぜんたる足取りで教室のすみから水の入っているバケツを両手に下げてきてストーブにかけている。花千は？ 彼は、もうもうたる灰かぐらの中で、あのありあまる巨体をあっちへうろろ、こっちへうろろ子ネズミのように動き回っているだけである。ストーブの火は委員長のとっさの機転と沈着な行動によって消えた。やがて、受持ちの先生が、誰かの報告により、変事を知ったらしく、顔色を変えて入ってきたが、横倒しになったストーブともうもうたる煙幕とビシヨビシヨの床を見て、ほっとしたらしく、大きく息を吐いたが、やおら氣を取り直して、

「誰だ、ストーブを倒したのは？」

先生特有の何者も許さない厳とした態度で、私達を一回り見渡される。——この先生は職員室でたとえれば、さしずめ、三木律子であり、「元祖」というニックネームは「ガリ勉の元祖」だからであろうと、もっぱらのセンサク好きな人々の推測である。——皆、机の上や、膝の上の自分の手を見つめているだけで返事をしない。ただ関係のない女生徒だけが二、三、隣同士でささやき合っているくらいで、いつにない静けさだ。このような静けさを、死の静けさともいうのであろう。

「花村、きみか？」

さすが先生、が、返事がない。つづいて先生は、やつぎ早やに五、六人の男の子を名指してたずねた。いずれも花千の子分連中である。もちろん返事などありはしない。期待する方が無理と

いうものだ。誰だって親分は恐い。そのうえ彼等には「仁義」がある。

「相川、相川マリコ」

突然名を呼ばれて、私はギョツとした。

「は……はい」

仕方がないから立ち上がる。なにも私なんか呼ばないでも、委員長が……うわあー、その委員長はどこへ行ったやら教室じゅう見渡したがいないのである。

「誰がストーブを倒したのだ？」

元祖の声は多少カン走っている。誰も犯人を名乗って出ないであろう。誰だって私が倒しました。なんていうのはいやにきまっている。まして、花千の罪など引き受けるのはマッピラである。私は立ち上ったものの、とうわくした。こうした事態に直面したのははじめてである。いつも委員長がいろいろにさばいてくれるので、私はただ、ちょっと敬意を表して傍観していれば、それでことはすんだのだ。ところが、今日は違う。まったく違うのだ。かんじんの委員長閣下がご不在とあっては、また何をか言わんや、である。

「誰が倒したのだ！ なぜだまっておる？」

元祖は額に青筋を立てて私をにらみつける。

「それは」

意を決して答えかけた私にいつせいに花千一隊の非難の目がすいつく。特に花千の様子はすごい。どんぐりまなこはけいけいと光り、顔色は蒼白だ。おまけに唇まで色がない。

